

昭和初期における群馬県の観光プロモーションの特徴

関 戸 明 子

The Characteristics of Tourism Promotion in Gunma Prefecture in the Early Showa Era

Akiko SEKIDO

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第70巻 71—87頁 2021 別刷

昭和初期における群馬県の観光プロモーションの特徴

関戸明子

群馬大学共同教育学部社会科教育講座

(2020年9月30日受理)

The Characteristics of Tourism Promotion in Gunma Prefecture in the Early Showa Era

Akiko SEKIDO

Department of Social Studies Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 30th, 2020)

I はじめに

本稿は、昭和初期に推進された群馬県の観光プロモーションの特徴について、当時の社会的・地域的文脈とのかかわりから考察するものである。プロモーションとは、消費者の購買意欲を喚起するための活動であり、本稿では、観光客を誘致して地域振興を図るために、観光資源の開発や整備、観光地の宣伝、物産・土産物の紹介、関連団体相互の連携などの活動を行った「群馬県勝地協会」に焦点をあてる。「群馬県勝地協会」の設立は1935（昭和10）年で、協会が中心となって観光プロモーションが展開されていくことになる。

近代日本におけるツーリズムは、全国的な鉄道網の形成にともない急速に発達した。それは、第一次世界大戦後の1920年代から1930年代にかけてのことで、ハイキング・スキー・登山・海水浴・温泉などの人気が高まっていく。昭和に入ってからすぐの1927（昭和2）年、新しい日本の風景「日本新八景」を選定するイベントが行われた。そして1930年には鉄道省の外局として国際観光局が設置され、外客誘致のための事業が進められていく。この翌年には国立公園法が施行され、1934年3月、瀬戸内海・

雲仙・霧島の三つの公立公園が指定されることになる。こうした動きは、観光資源を整備して内外の観光客を誘致することを目的としており、観光による振興は、日本経済や地方経済にとって重要な課題となっていた。

荒山（1995）は、観光資源は国民国家の形成にともなう近代的産物であったと捉え、その多くは、今日の文化財保護法によって文化財として定義されているものに等しいこと、国立公園制度の成立は、政府の観光政策の一環として位置づけられることを指摘している。

日中戦争の始まった1937年7月以降になると、観光をめぐる議論は、経済的利益を中心にしたものから、愛国主義の促進に役割を求める方向へと移っていった。聖蹟ブームにあやかって歴史的な場所の商品化が行われ、聖蹟観光が盛んとなった。そして、観光は、「紀元二千六百年」の1940年にピークを迎えた（ケネス・ルオフ2010）。

近代ツーリズムに関する研究は多様な立場から進展しているが、本稿では、昭和初期の戦時下における県を主体とした観光プロモーションに着目し、戦時期において観光資源がどのように選ばれ、活用されたのかを明らかにしていく。

II 史蹟・名勝の位置づけと「日本新八景」

1 「史蹟名勝天然記念物保存法」における名勝

本稿では、群馬県勝地協会に着目するが、設立の趣意や会則をみても「勝地」という用語に対する説明はない。ただし、次のように下線を付した用例をみると、「名勝」と同意と考えられる。

政府が初めて史蹟・名勝の保存に向けての法案づくりに取り組んだのは、地方改良運動開始期の1910(明治43)年の地方官会議における史蹟勝地保存法案が始まりとされ(高木1991)、1919(大正8)年に「史蹟名勝天然記念物保存法」が制定された。また、京都府は1917年に「史蹟勝地調査会」を設置しており(斉藤2019)、東京府は1918年に「史的記念物天然記念物勝地保存心得」を布告している¹⁾。このように、「史蹟(史蹟, 史的記念物)」と対になって「勝地」が用いられている。

次に「史蹟名勝天然記念物保存法」における「名勝」とは何を指したのかをみておきたい。1920年の「史蹟名勝天然記念物保存要目」によれば、名勝として保存すべきものとして、1. 公園・庭園, 2. 橋梁・堤防・築堤, 3. 花樹・花草・紅葉, 鳥獣・虫魚の名所, 4. 奇岩, 5. 峡谷・急流・深淵, 6. 瀑布, 7. 湖沼, 8. 浮島, 9. 松林のある砂丘・砂嘴, 10. 海岸・島嶼・その他の景勝の地, 11. 風景を眺め得る特種の地点, を列挙する²⁾。

黒田・小野(2004)は、名勝は保存対象として風景の概念を包含しているものの、広い範囲の風景は対象とならなかった。一方、天然記念物には、天然記念物に富める代表的区域(天然保護区域)の規定があることから「名勝及天然記念物」の指定が行われたが、これも風景の概念とはうまくかみ合わなかった、と論じている。こうした広い範囲の風景の保護については、国立公園制度へと受け継がれていくことになる。

2 「日本新八景」と群馬県における候補地

1927年に行われた「日本新八景」選定は、新たな風景の価値を創り出したメディア・イベントであった。これは、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社

の主催、鉄道省の後援で行われた。推薦投票の結果をもとに、審査委員会の協議によって、山岳・渓谷・瀑布・湖沼・河川・海岸・平原・温泉の八つの部門において、八景・二十五勝・百景が決定された。

一般からの推薦投票は、一枚の官製ハガキに一景を記入して投函する形式をとった。推薦された景勝地は1470か所、投票総数は9348万票(無効票を含む)を数えた。このイベントは、わが村わが町の名誉と観光振興のため地元による組織的な集票活動があったこと(白幡1992)、風景のローカリズムを喚起し、郷土そのものをつくりあげる運動であったこと(荒山2003)が指摘されている。

翌1928年には、八景と二十五勝の選定地の中から、上高地、瀨八丁、十和田湖が「名勝及天然記念物」、室戸岬が「名勝」の指定を受けた(黒田・小野2004)。さらに1929年の「史蹟名勝天然記念物保存要目」の改正により、12番目の項目として、特色ある山岳、丘陵、高原、平原、河川及温泉地が追加された³⁾。これは、前述の11項目にはなく、「日本新八景」の部門にあった風景を補完するようになっている。このように「日本新八景」選定は、「史蹟名勝天然記念物保存法」に影響を与えたことがうかがえる。

ここで、群馬県勝地協会の活動を検討する前に、群馬県における「日本新八景」選定候補地の投票結果を概観しておきたい。

表1には、得票数上位の観光地を示した。八つの部門のうち、群馬県で1,000票以上得票したところがない海岸・河川・平原は省略した。河川部門の「利根川」は409,473票を得ているが、千葉県の扱いとなっている。渓谷部門に「利根渓谷」がみえるので、群馬県では「利根渓谷」として投票されたと考えられる。

このイベントで最も票を集めた群馬県の観光地は菅沼(片品村)で87万票余、次いで赤城山が51万票弱、妙義山が24万票となっている。追貝吹割瀧と追貝吹割溪(吹割の滝, 利根村)、尾瀬湖(尾瀬沼, 片品村)も多くの票を集めており、群馬県北東部の利根郡に目立っている。こうした得票の傾向は、国立公園の選定とも関わっていると考えられる⁴⁾。尾

表1 日本新八景の得票数上位10位までと1,000票以上の群馬県の観光地

温泉			瀑布			渓谷		
花巻温泉	岩手	2,120,488	袋田瀧	茨城	460,838	天龍峽	長野	3,127,170
熱海温泉	静岡	1,038,287	赤目四十八瀧	三重	453,659	御嶽昇仙峽	山梨	2,992,930
山中温泉	石川	907,862	神庭瀧	岡山	436,053	瀨八丁	和歌山	2,064,590
和倉温泉	石川	740,334	箕面瀧	大阪	316,153	長瀨	埼玉	1,321,994
三朝温泉	鳥取	570,356	養老瀧	岐阜	310,902	帝釈峽	広島	1,171,103
芦原温泉	福井	556,188	魚住瀧	大分	303,655	長門峽	山口	913,421
東山温泉	福島	529,344	富士白糸瀧	静岡	290,002	三段峽	広島	900,461
片山津温泉	石川	516,718	王余魚瀧	徳島	262,283	黒部峡谷	富山	822,639
伊東温泉	静岡	507,488	華厳瀧	栃木	214,381	恵那峽	岐阜	776,687
別府温泉	大分	484,697	木曾田立瀧	長野	180,940	祖谷溪	徳島	727,378
草津温泉	群馬	6,667	追貝吹割瀧	群馬	95,384	利根溪谷	群馬	28,711
						追貝吹割溪	群馬	5,698
山岳			湖沼					
温泉岳	長崎	3,818,721	富士五湖	山梨	1,328,978			
御嶽	長野	1,156,622	菅沼	群馬	872,348			
清澄山	千葉	990,749	十和田湖	青森秋田	734,112			
信貴山	奈良	960,530	宍道湖	島根	684,018			
英彦山	福岡	936,509	琵琶湖	滋賀	594,538			
阿蘇山	熊本	555,934	大沼	北海道	466,234			
高尾山	東京	526,335	加茂湖	新潟	252,954			
赤城山	群馬	506,988	田沢湖	秋田	168,871			
大台ヶ原山	奈良	501,556	一碧湖	静岡	118,103			
雪彦山	兵庫	467,084	洞爺湖	北海道	113,512			
妙義山	群馬	240,228	尾瀬湖	群馬	15,261			

名称は記事の表記に基づく

海岸・河川・平原は省略

〔大阪毎日新聞〕1927年6月10日より作成

瀨を含む日光国立公園は1934年12月に成立している。このとき、大雪山、阿寒、中部山岳、阿蘇も同時に指定された。

「日本新八景」審査委員会による協議の結果、群馬県では八景と二十五勝に選ばれたところはなく、百景に赤城山、妙義山、菅沼、尾瀬沼の4か所が選定された。

III 群馬県勝地協会の設立と事業の展開

1 協会設立の目的と背景

群馬県は、1935年3月20日に群馬県勝地協会を設立した⁵⁾。「群馬県勝地協会会則」には、本会は、本県下における勝地の保護発展を図ることを目的とする。とある。

会長には当時の群馬県知事・君島清吉、副会長には群馬県経済部長と県会議長など、理事には群馬県総務部長・学務部長・警察部長・土木課長・林務課長・商工課長・衛生課長といった行政職や前橋・高

崎・桐生市長など、監事には前橋・高崎の商工会議所会頭など、評議員には伊香保・水上・草津・四万といった温泉地の組合長や各郡の町村長会支部長などが就任しており、官民挙げての組織だったことがわかる。「設立趣意書並会則」⁶⁾には、次のようである。

本県は三面秀嶺を繞らして坂東太郎の清流を養ひ(略)山河襟帯到る処風光明媚の勝地である。加ふるに史蹟、伝説の人口に膾炙するもの極めて饒く、動植物の世に珍稀なるもの亦少くない。更に温泉は各所に湧出して、古来著しき靈験を伝へ、帝都に近く交通至便なるは真に本県独特の天恵と謂はねばならぬ。殊に上毛三山の一たる赤城山には、昨秋 畏くも 聖駕を枉げさせ給ひ次で奥利根一帯の地は国立公園に指定されて景勝群馬の名声は彌々揚り、正に錦上花を添うるの趣がある。

このように群馬県は風光明媚の勝地であり、史蹟や温泉も多く、東京に近いことをうたっている。「聖

駕を枉げ」とあるのは、1934年11月、群馬県庁に大本営を置いて陸軍特別大演習が行われて、さらに県内を昭和天皇が行幸したことになむ。また1934年3月に初めて3か所の国立公園が指定されたのに続き、同年12月に指定を受けた日光国立公園に「奥利根一帯の地」である尾瀬が含まれた。こうしたことが協会設立の契機となったのであろう。なお、尾瀬ヶ原や尾瀬沼などの地域は2007年に尾瀬国立公園として分離された。

さらに協会設立の趣意を次のように述べている。

地元大衆の理解と用意とは未だ此の天資に添はず動もすれば其の勝景を傷け、或は適當の施設を謬り、却て造化の殊寵を暴殄するものさへあるは、夙に識者の憂ふる所である。(略) 近時一般保健思想の向上は交通機関の発達と相俟て、野外趣味の勃興を促し、国策亦国立公園の開設を計つて以来、各地競うて其の助成策を講じ、天下靡然として観光施設に汲々たる状況である本県民たるもの、豈此の勝地を擁して拱手傍観するを得やうか。(略) 是に於て関係者並に有志相諮り、官民合同の勝地協会を設立し、統制ある組織の下に県下の景勝霊地を江湖に紹介し、其の愛護開拓を図つて、来遊者に利便を与へ、大いに内外の観光客を迎へ、以て益々国土の精粹を顕揚し、文化の進展に寄与すると共に、天与の恵沢を頒つに遺憾なきを期せんとするものである。

保健思想の向上、野外趣味の勃興とは、この時期に健康への関心が高まり、ハイキング、スキーなどが人気となったことがある。このように群馬県勝地協会は、官民合同の組織のもとで景勝地を紹介し、内外から観光客を迎え、国土の精粹を顕揚し、文化の進展に寄与することを目的として設立された。

2 協会による事業の展開

「群馬県勝地協会会則」には、次の11の事業を行うとある。①勝地の保護開発利用に関する施設、②国県立公園の施設促進に関する調査および研究、③目的を同じくする他団体との連絡、④国県立公園、勝地、温泉地等を連絡する観光系統の樹立、⑤勝地

の推薦、宣伝および紹介、⑥観光者誘致に関する施設、⑦物産、土産物、郷土芸術品等の調査宣伝紹介、⑧観光に関する図書その他の出版、⑨研究会、講演会、展覧会等の開催、⑩功労者の表彰、⑪その他本会の目的を達成するのに必要な事業。

以下では、群馬県勝地協会が具体的にどのような事業を行っていたのかを、1935～1938年度の「歳入歳出決算並事業成績」⁷⁾からみていきたい。

まず1935年度の事業成績では、以下の6事業を報告している。

1. 国立公園映画作製 県内の菅沼、丸沼、尾瀬沼、尾瀬ヶ原などの景勝地映画を作製した。
2. 赤城公園座談会 風景協会の会員30余名が赤城山に登山し、翌日、湖畔にて座談会を開催、筆記録を会誌「風景」に掲載し、天下に紹介した。
3. 温泉とスキー展覧会 上野駅における東京鉄道局、日本旅行協会、日本温泉協会主催の展覧会に、各温泉地・スキー場より郷土演芸が出演し、本会よりは八木節を出演させた。
4. スキー大会 赤城公園にて大会を開催し、参加者200余名に達して盛況であった。
5. 「勝地群馬」刊行 県全体の鳥瞰図、名勝地をとりまとめた「勝地群馬」を作製した。鳥瞰図は斯界の権威者・吉田初三郎画伯、実地の踏査の上、執筆したもので、美麗を極め、観光客誘致の上、多大の効果を収めた。
6. 勝地絵はがき刊行 県下より赤城山・榛名山・妙義山・尾瀬・貫前神社・躑躅ヶ岡公園・吾妻峡・大光院の8か所を選定して刊行した。

1935年度の歳出の内訳は表2のとおりである。事業費をみると、鳥瞰図の印刷費が3,453円32銭で、同年度の歳出全体の53%を占めていた。これに次ぐ絵はがき印刷費1,140円と比べても大きい。この鳥瞰図については、次のIVで取り上げる。

1936年度の事業成績には下記の12報告がある。

1. カメラ大会 県立躑躅ヶ岡公園において、参加者131名で開催され、入選者に賞品を贈与した。
2. 赤城開発座談会 在京群馬県人有志による赤城開発座談会を開催し、多数の参加があった。
3. 勝地宣伝 7月5日魁新聞夕刊に景勝地の写真

表2 1935年度における群馬県勝地協会の歳出内訳

円 銭	
501 65	事務費 (印刷・職員手当など)
201 76	会議費
5,845 46	事業費
343 80	国立公園映画撮影費
59	温泉・スキー展覧会費
3,453 32	鳥瞰図印刷費
1,140	絵はがき印刷費
13 75	赤城公園座談会費
335 59	スキー大会費
500	土木出張所手当
6,548 87	歳出総計

(「昭和10年度歳入歳出決算並事業成績」より作成)

表3 1936年度における群馬県勝地協会の歳出内訳

円 銭	
1,373 32	事務費 (印刷・職員手当など)
174 98	会議費
1,934 25	事業費
200	魁新聞広告代
256 31	温泉博覧会への出演費・印刷費など
30	国立公園指定記念展覧会負担金
197 62	勝地スタンプ賞品代など
109 30	観光客誘致座談会費
100	温泉展覧会へ郷土演芸の補助金
25 2	スキー講演・映画会費
69 99	草津スキーカーニバル映画製作費など
357 93	榛名公園スキー・スケート大会費用
150	赤城スキー大会補助金
229 15	カメラ大会ポスター・賞品代など
40	赤城開発座談会費
168 93	支部創立費
1,192 50	支部交付金
4,378	基金積み立て
9,053 5	歳出総計

(「昭和11年度歳入歳出決算並事業成績」より作成)

と紹介文を掲載し、観光群馬を宣伝した。

4. 温泉博覧会 時事新聞社主催の東日本温泉博覧会に写真や鳥瞰図を出品し、パンフレットなどを観覧者に配布した。
5. 勝地スタンプ作製 スタンプの図案を県下小学校長に依頼し、教員から73点の応募があった。入選者には賞品を贈与し、スタンプを希望した支部には製作費の5割を負担し作製させた。
6. 国立公園指定記念展覧会 国立公園協会主催の展覧会に、日光国立公園丸沼を中心とするジオラマを出展し、紹介宣伝をした。
7. 観光客誘致座談会 観光客誘致、観光施設などについて意見交換し、筆記録を印刷、配布した。
8. 講演と映画会 群馬会館においてスキーに関す

る講演と映画会を開催した。

9. 温泉とスキー展覧会 東京鉄道局主催の展覧会に、各温泉地・スキー場より郷土演芸の出演に対して後援し、国立公園に関する映画を上映した。
10. 映画作製 草津町のスキーカーニバルの実況と付近の風景、伊香保町のスケート大会の実況について16ミリ映画を作製した。
11. スケート大会 県立榛名公園でスケート大会を開催し、6種目、参加者200余名に達して盛況であった。同日開催したスキー大会も盛況をみた。
12. 赤城山スキー大会 補助金を交付して後援した。スキー場・赤城公園の宣伝に効果があった。

1936年度の歳出総計は、前年度より大きくなっているが、事業費については5,845円46銭から1,934円25銭へと減少している(表3)。スケート大会の費用が最大となっているが、鳥瞰図印刷費の10分の1にとどまっており、特筆する事業はなかったといえる。ともあれ、温泉とスキーに関連するイベントが目立つ。

1937年度の事業成績には次の10報告がある。

1. 観光祭の施行 5月3日より1週間、ポスターの掲出、葉の頒布、講演会を催したほか、小学生に風景愛護、郷土美化に関する作文を募集し、佳作に賞状・賞品を授与した。
2. カメラ大会助成 太田支部主催のカメラ大会に補助金を交付した。
3. 勝地宣伝 ジャパンタイムズ社発行の特集号に県内勝地の英文紹介を掲載した。
4. つつじの紹介 赤城山、浅間高原、榛名山などのつつじの紹介のため、数回ラジオ放送をした。
5. キャンプの援助 鉄道省募集赤城山キャンプの来場者に宣伝印刷物を贈り、郷土芸術の出演を図って地方情緒を紹介した。
6. 活動写真の映写 東京在住県人会の集会にあたり県内観光映画を上映した。
7. 勝地案内標識の設置 観光地群馬の認識を深めるため鉄道沿線13か所に案内標識を建設した。
8. 景勝写真と洋画の作製 写真家・岡田紅陽、画家・北島浅一、清水刀根氏等に依頼、作製した。
9. ジオラマ作製 高崎支部と磯部温泉が共同し、

白衣観音と磯部温泉のジオラマを作製した。

10. サービス講習会の開催 旅行者への接遇の改善向上を図るため、4回の講演会を開催した。

1937年度の決算書では、事業費は6,634円20銭と増加した(表4)。細目ごとの経費が記載されていないが、会誌2号分など出版費に2,828円42銭と多くをかけている。英文の案内やラジオ放送などが行われた。

1938年度の事業成績には次の19報告がある。

1. 山の料理講習会の開催 土地の産物を材料として特色ある料理を提供するために講習会を草津、四万、伊香保、水上の温泉地で開催した。
2. 傷病兵慰問 入院中の傷病兵に対して本会特製の勝地絵はがき一組を贈呈した。
3. 観光座談会の開催 観光事業を時局に対応して適切に伸ばす方法に関して座談会を開催した。
4. 講演と映画の会開催 観光報国週間に際し、講演と観光映画の上映を行った。
5. 勝地群馬発行 3号を発行した。

表4 1937年度における群馬県勝地協会の歳出内訳

円 銭	
3,021 45	事務費(印刷・職員手当など)
308 37	会議費
6,634 20	事業費
380 78	調査費
2,121 58	紹介宣伝費(洋画、ジオラマ作製など)
2,828 42	出版費(会誌1-2号など)
843 96	設備費(標識建設)
459 46	雑費(運搬費など)
2,012 35	支部交付金
1,084 50	基金積み立て
13,060 87	歳出総計

(「昭和12年度歳入歳出決算並事業成績」より作成)

表5 1938年度における群馬県勝地協会の歳出内訳

円 銭	
3,093 18	事務費(印刷・職員手当など)
228 66	会議費
7,163 75	事業費
191 40	調査費
1,760 45	紹介宣伝費
4,427 13	出版費
397 22	設備費
387 55	雑費
2,490 17	支部交付金
180	基金積み立て
13,155 76	歳出総計

(「昭和13年度歳入歳出決算並事業成績」より作成)

6. ハイキングコースのラジオ放送 33のハイキングコースの中から主要コースを紹介するラジオ放送を行った。

7. つつじ案内 赤城、浅間、榛名のつつじの案内書をホテル等に送り、ラジオ放送を行った。

8. 旅館従業員の表彰 旅館従業員の勤続者98名に対して賞状・賞品を授与した。

9. 児童作文の募集 健康旅行等に関心を深める趣旨の下に児童の作文を募集し、応募者680名中、優秀33名に対して賞状・賞品を授与した。

10. 郷土写真の懸賞募集 健康資源を広く紹介して体位向上に役立たせる趣旨の下に写真を募集し、応募作品211点を審査し、入選出品者16名に対して賞状・賞品を授与した。

11. 勝地群馬発行 4号を発行した。

12. 傷病勇士の慰問 入院中の傷病兵を慰問し、地方味豊かな全紙四つ切り写真10点を贈呈した。

13. 赤城登山標識の設置 登山コースに指導標を設け、名勝の案内看板を建設した。

14. 勝地群馬発行 2巻4号を発行した。

15. スキー・スケート案内の頒布 体位向上に資する県内スキー場・スケート場のパンフレットを作製し、大学・官庁・会社・クラブ等に発送した。

16. 原色版絵はがきの作製 北島浅一、清水刀根画伯の揮毫した上毛三山、尾瀬、吾妻溪谷の絵はがき(5枚1組)を作製した⁸⁾。

17. 支部係員事務打合会の開催 会員名簿の整理、指導標の設置、会誌の頒布など行った。

18. 感謝状の受領 本会からの恤兵品の贈呈に対して陸軍大臣より感謝状の下付があった。

19. 本会通常総会 通常総会を開催し、閉会後に講演と映画上映を行った。

1938年度の決算書でも細目ごとの経費が記載されていない(表5)。印刷費が3,000円の予算よりも大きく4,400円余となっている。事業成績には会誌3号分の記載があるが、年4回の発行であり、原色絵はがきも作製していることから、費用がかかったと考えられる。この年度では、傷病兵慰問を2度行っていて、それに対して感謝状を受けている。体位向上を打ち出すなど、戦時体制へ対応した動きがみら

れる。

このように、群馬県勝地協会は、映画の製作・上映、展覧会への出品、鳥瞰図・絵はがき・雑誌の刊行、スキー・スケート大会の開催、新聞・ラジオによる宣伝、座談会・講習会の開催、案内標識の設置など、さまざまな事業を展開していた。

IV 「勝地群馬」にみる観光資源

1 「勝地群馬」の概要と裏面の案内

鳥瞰図「勝地群馬」の印刷費は1935年度の歳出の5割を占めていた。1935年3月設立の群馬県勝地協会にとって、「美麗を極め、観光客誘致の上、多大の効果を収めた」と報告されたこの鳥瞰図は、群馬県の観光資源をどのように選び、宣伝しようとしていたのかを考察するのに、恰好の素材である。

鳥瞰図の作者は吉田初三郎（1884～1955）である。初三郎の鳥瞰図は、大胆なデフォルメを特徴とする独特の構図をもち、タテ17～18cm×ヨコ75～78cmという大きさが一つの定番となっている。このような横長のサイズで、折り畳み式となっている鳥瞰図は、吉田初三郎によって、携帯に便利のように創案されたもので、この形態が初三郎の鳥瞰図の特色となっている。さらに、初三郎の鳥瞰図は、弟子たちを使って、写生・原画制作・印刷・装幀といった工程を組織化して大量生産された。その作品は1600点を超えるといわれており、従来の観光案内図とは一線を画して、大きな影響を与えた（関戸2008；堀田2009）。

本図の発行は1936年4月10日、編輯兼発行者は群馬県勝地協会、著作権兼著作権所有者は吉田初三郎となっている。多くの刊行図には「絵に添へて一筆」という初三郎の緒言が掲載されているが、本図にはそれはない。図裏面の案内情報は、群馬県勝地協会によって編集されたものであろう。

裏面は上下2段に組まれている。右上に「沿革」があり、古代から近世の歴史、群馬県の成立過程を述べている。続いて表形式で、名所、温泉、スキー場・スケート場、著名な神社・仏閣、史蹟・天然記念物、国宝・重要美術品・古社寺の項目ごとの一覧

と、上州民謡11曲の歌詞を掲げている。民謡以外の項目を表6に示した。

名所とスキー場・スケート場に一部重複がみられるものなどを整理すると、109か所（事物）となる。天然記念物・国宝・重要文化財以外の大半の場所は、鳥瞰図に描かれており、群馬県勝地協会が宣伝したい観光資源と鳥瞰図の描写は、よく連携がとれているといえる。

項目のうち、史蹟と天然記念物で鳥瞰図刊行前に指定を受けていたものは、この表に網羅されている（群馬県内政部1943）。高木（1991）は、史蹟・名勝の保存は、地方改良運動における国民教化をはじめとする天皇制イデオロギーとリンクしていたことを示している。明治天皇の聖蹟6件は、1933年と1934年の指定である。名勝は、1923年に妙義山、1934年に躑躅ヶ岡（ツツジ）、1935年に吾妻峡が指定されており、名所の一覧に含まれている。さらに1936年12月に吹割溪ならびに吹割瀑、1937年に三波川（サクラ）が加わる。表6の名所には、山岳や溪谷、公園などが多くみられる。

また、温泉は医療を補助するもの、保健に役立つものとして、明治前期から全国的な調査が行われており（関戸2020）、スキーとスケートは冬のスポーツとして人気があった。いずれも鉄道省による案内書が1920年代に刊行されている⁹⁾。

2 「勝地群馬」の構図と描かれたもの

「勝地群馬」は、タテ19cm×ヨコ103cmと、定番のサイズよりもさらに横に長い¹⁰⁾。初三郎の署名の脇には「群馬全県名勝史蹟交通鳥瞰図」とあり、そのタイトルのとおり、県下の名所・神社仏閣・史蹟・温泉などを数多く描き込んでいる（図1）。

図の下部に利根川が流れており、平野部に藤岡・高崎・前橋・伊勢崎・桐生・太田・館林といった市街地を配置している。中景には上毛三山と呼ばれる妙義山・榛名山・赤城山の特徴的な山の姿が描かれており、遠景には煙たなびく浅間山や草津白根山、谷川岳などの県境の山々がみえる。このように本図は、山がちな群馬県の地形を高い視点から眺めて解体し、躍動感ある山並みの中に、各地の名所や神社

表6 「勝地群馬」の裏面に掲載された名所などの案内情報

* 項目と名称		神社	
名所	0 新鹿沢温泉	0 瀧沢石器時代遺跡	
1 日光国立公園	1 万座温泉	1 国幣中社貫前神社	0 上野国分寺跡
0 県立赤城公園	1 川原湯温泉	1 県社木曾三社神社	0 浅間山古墳
0 県立榛名公園	0 川中温泉	1 県社赤城神社	0 大鶴巻古墳
1 県立躑躅ヶ岡公園	1 鳩ノ湯温泉・薬師温泉	0 県社総社神社	1 二子山古墳 (総社)
1 銚子の伽藍	1 花敷温泉	1 県社 (式内六ノ宮) 榛名神社	1 山王塔跡
1 仙貫沼	0 湯ノ平温泉	0 県社伊香保神社	1 箕輪城跡
1 岩井洞	1 湯小屋温泉	1 県社妙義神社	1 多胡碑
1 三波川の冬桜	1 水上温泉・湯原温泉	1 県社熊野神社	0 山上碑及古墳
1 三波石	1 谷川温泉	0 県社榛名神社／沼田	0 金井沢碑
1 不二穴	1 湯檜曾温泉	1 県社玉村八幡宮	0 七輿山古墳
1 妙義山	1 宝川温泉	1 県社新田神社	0 水上石器時代住居跡
1 黒瀧山	1 湯宿温泉	1 県社高山神社	1 女体山古墳
1 神津牧場	1 法師温泉	1 県社生品神社	1 高山彦九郎宅跡
1 荒船山	1 笹ノ湯温泉	1 県社八幡宮／前橋	附遺髪塚
1 碓氷峠	1 湯島温泉	1 県社東照宮／前橋	0 生品神社境内
1 吾妻峡	1 利根温泉・大室温泉	1 県社高崎神社	(新田義貞拳兵伝説の地)
1 岩櫃山	1 老神温泉・穴原温泉	1 県社天満宮／桐生	0 金山城跡
1 浅間山	1 川場温泉	0 県社 (式内四ノ宮) 甲波宿禰神社	0 二子山古墳 (前橋)
1 鬼押出岩	1 白根温泉	0 郷社 (式内) 大國神社	天然記念物
1 六里ヶ原	1 丸沼温泉	0 郷社 (式内八ノ宮) 火雷神社	0 横室の大榎
1 鳥居峠	1 藪塚鉾泉	1 郷社 (式内丸ノ宮) 倭文神社	0 榛名神社の矢立杉
1 野反池	スキー場	1 郷社 (式内) 加茂神社	0 妙義神社の大杉
1 草津白根山 (白根山)	1 赤城山	0 郷社 (式内七ノ宮) 小祝神社	1 安中市市の杉並木
1 武尊山	1 榛名山	1 郷社 (式内) 美和神社	0 原町の大榎
1 谷川岳	△ 神津牧場	0 村社 (式内) 宇藝神社	0 川原湯岩脈
0 水上溪谷	0 万座	仏閣	0 前橋城跡の枝寄り松
1 奥利根溪谷	△ 鹿沢温泉	0 善勝寺	0 高崎公園の白木蓮
1 迦葉山	△ 新鹿沢温泉	0 善昌寺	0 むじなも産地
1 吹割ノ滝	△ 六里ヶ原	1 水澤寺	0 かもしか
1 三国峠	1 草津	0 慈眼寺	国宝
1 華藏寺公園	1 芳ヶ平	0 淨法寺	0 鉄造阿彌陀如来坐像
1 連取ノ松	△ 草津白根山	1 不動寺	0 白銅月宮鑑
1 金山	0 四万	0 龍華院	0 梅雀文様銅鏡
1 阿左美沼	0 渋峠	1 大光院	0 竹虎文様銅鏡
1 高津戸	△ 野反池	1 金龍寺	0 了戒ノ太刀
1 前橋公園	0 上ノ原	1 照明寺	0 貫前神社本殿
1 敷島公園	1 土合	1 善導寺	0 薬師堂
1 高崎公園	0 大穴	1 茂林寺	0 玉村八幡宮本殿
1 観音山	0 谷川	0 龍海院	0 雷電神社境内社稲荷神社
1 丸山公園	0 鹿野沢	1 清水寺	重要美術品
1 桐生ヶ岡公園	0 大原	0 大信寺	0 薬師塚出土品
温泉	△ 日光国立公園	0 安国寺	0 四神附飾土器
1 梨木鉾泉	(戸倉・尾瀬・奥日光)	史蹟	0 立原杏所筆八曲屏一隻
1 伊香保温泉	スケート場	0 明治天皇渋川行在所	古社寺
1 八塩鉾泉	△ 赤城山	0 明治天皇新町行在所	0 郷社辛科神社
1 霧積温泉	(大沼・小沼・血の池・覚満淵)	0 明治天皇原市御小休所	0 曹洞宗仁叟寺
1 磯部鉾泉	1 榛名湖	0 明治天皇五料御小休所	1 郷社東照宮
1 四万温泉		0 明治天皇前橋行在所	1 天台宗長楽寺
1 沢渡温泉		0 明治天皇高崎行在所	
1 草津温泉	* 鳥瞰図に文字ラベルがある場合に「1」、ない場合に「0」、表に重複掲載されているものには「△」を入れた	1 前二子古墳	
1 香草温泉		1 中二子古墳	
		1 後二子古墳 附小古墳	前・中・後二子古墳は鳥瞰図には「二子古墳」として記載

仏閣を巧みに配置した独創的な構図をとっている。

高崎線・八高線・上越線・両毛線といった国鉄は赤い線で、東武鉄道、上毛電気鉄道、上信電気鉄道、伊香保電気鉄道、草津電気鉄道などの私鉄は青い線で記入されており、各地を結んでいる。このうち、東京、高崎、前橋、桐生の四つの駅は、青地に白文字の小判型の文字ラベルで示されている。

表7は、文字ラベルの種類と図のなかで位置を整理してまとめたものである。青地に白文字の長形の文字ラベルは、図の右上にある日光国立公園と群馬県庁の二つに用いられている。また、赤地で長形の文字ラベルとなっているのは、図の左から貫前神社、妙義山、高崎公園、浅間山、榛名湖、敷島公園、白根山、赤城山、武尊山、桐生が岡公園である。これらは、目立つ色で強調されている。

最も多いのは、白地に長形の文字ラベルである。名所の多くが、このラベルを付されている。一方、

市町村や鉄道の駅の名称は、白地に小判型の文字ラベルで案内されている。

利根川上流部や吾妻川流域には多くの温泉地が点在しているが、温泉の文字ラベルは長形で桃色になっていて識別しやすい。他方で、八塩・梨木・藪塚の三つの鉱泉は白地で示されている。これらの温泉と鉱泉を合わせると29か所となる。これは、鉄道省編『温泉案内』にある1931（昭和6）年版37か所、1940（昭和15）年版47か所と比べると少ないもの（関戸2007:152-154）、観光客が訪れるのに適当な場所をバランスよく配置しており、温泉の豊富さを巧みに伝えているといえる。

次に、鳥瞰図の制作にあたって、「実地の踏査」や資料収集が丁寧に行われていたことを示す例を取り上げたい。図2には、1928年竣工の群馬県庁、1933年開局の日本放送協会前橋放送局のアンテナ、1928年完成の佐久発電所のサージタンクといった

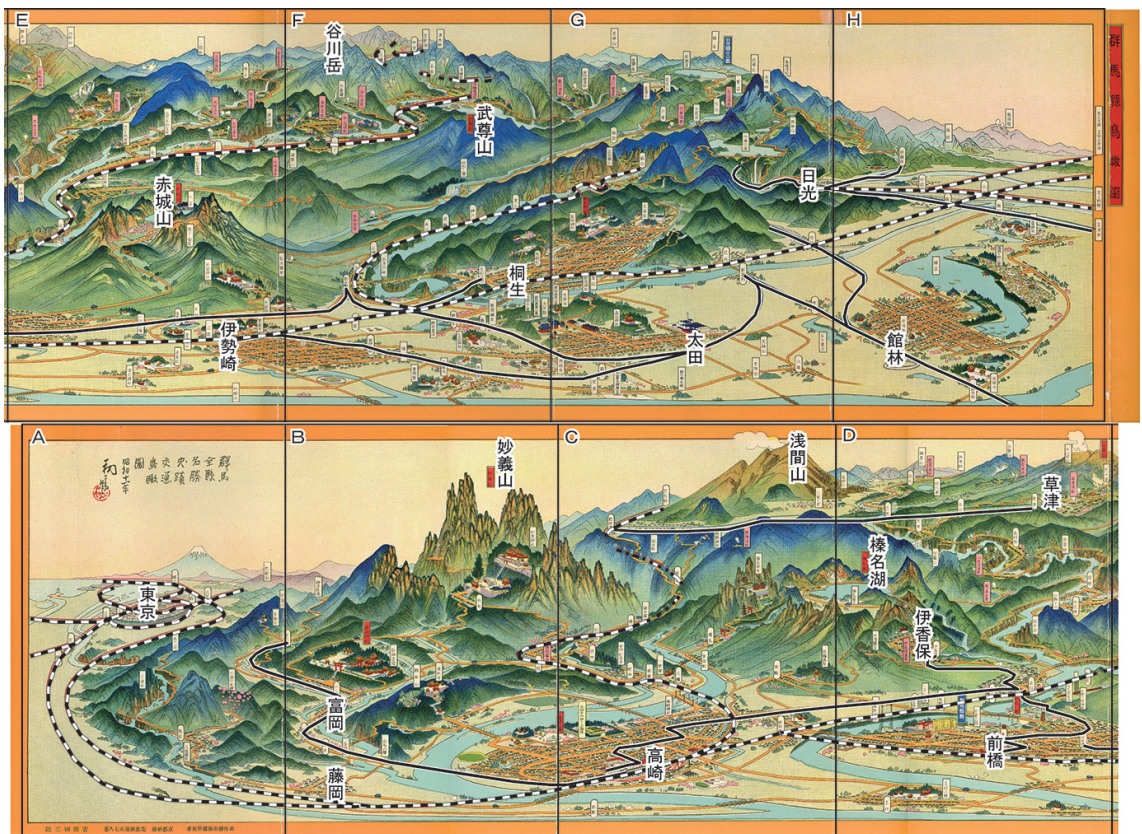


図1 吉田初三郎「勝地群馬」全体図（筆者蔵）（注：国鉄と私鉄の路線を強調している）

表7 「勝地群馬」の文字ラベルの一覧

* ** 文字ラベル	* ** 文字ラベル	* ** 文字ラベル	* ** 文字ラベル	* ** 文字ラベル
長形・青	0 D 小野子山	0 G 皿伏山	1 D 万座温泉	1 D 山王塔陞
0 D 群馬県庁	1 D 岩井洞	0 G 尾瀬沼	1 D 草津温泉	0 D 群馬総社
1 G 日光国立公園	1 D 榛名富士	0 G 燧岳	1 D 川原湯温泉	0 D 中央前橋駅
長形・赤	1 D 水澤観音	0 G 白根山	1 D 鳩ノ湯温泉	0 D 敷島
	0 D 前橋放送局	0 G 鬼怒沼山	1 F 水上温泉	0 D 八木原
1 B 貫前神社	1 D 二子山古墳	0 G 金精峠	1 F 老神温泉	0 D 渋川
1 B 妙義山	1 D 前橋公園	0 G 足尾銅山	1 G 宝川温泉	0 D 玉村
1 C 浅間山	1 D 八幡宮	0 G 大尻沼	1 G 湯之小屋温泉	0 E 後閑
1 C 高崎公園	1 D 東照宮	0 G 丸沼	1 G 白根温泉	0 E 猿ヶ京
1 D 白根山	1 D 木曾三社神社	0 G 菅沼	1 G 丸沼温泉	0 E 上牧
1 D 榛名湖	0 D 佐久発電所	0 G 中禅寺湖	小判・青	0 E 沼田
1 D 敷島公園	1 D 玉村八幡	0 G 男体山	0 A 東京	0 E 岩本
1 E 赤城山	0 D ケーブルカー	1 G 美和神社	0 C 高崎	1 E 仙貫沼
1 F 武尊山	1 E 野反池	1 G 天満宮	0 D 前橋	0 E 大胡
1 G 桐生ヶ岡公園	0 E 白砂山	1 G 金山	0 F 桐生	0 E 大前田
長形・白	0 E 茂左工門地藏	1 G 新田神社	小判・白	0 E 伊勢崎
	0 E 塩原多助生家	1 G 金龍寺	0 A 横浜	0 F 土樽
1 A 荒船山	1 E 三国峠	0 G 新田義貞公墓	0 A 新宿	0 F 中里
1 A 黒瀧山	0 E 諏訪峡	1 G 照明寺	0 A 八王子	0 F 土合
1 A 不動寺	0 E 子持山	1 G 高山神社	0 A 八王子	0 F 湯檜曾
1 A 不二穴	0 E 沼田城趾	1 G 高山彦九郎誕生地	0 A 上野	0 F 水上
1 A 三波石	0 E 大沼	0 G 朝子塚古墳	0 A 日暮里	0 F 新大間々
1 A 三波川ノ冬桜	0 E 小松発電所	1 G 女体山	0 A 大宮	0 F 大間々々
1 A 八塩鉱泉	0 E 小沼	0 G 天神山	0 A 熊谷	0 F 上神梅
1 B 神津牧場	1 E 銚子ノ伽藍	0 G 多々良沼	0 A 鬼石	0 F 水沼
0 B 敬神道場	1 E 赤城神社	0 H 塩原	0 B 下仁田	0 F 花輪
1 B 観音山	1 E 梨木鉱泉	0 H 那須岳	0 B 一ノ宮	0 F 神戸
1 B 清水寺	1 E 二子古墳	0 H 東北本線 至仙台青森	0 B 富岡	0 F 沢入
1 B 多胡碑	1 E 連取松	0 H 城沼	0 B 福島	0 F 国定
0 B 山名八幡	1 E 公園/華蔵寺	1 H 躰躰ヶ岡公園	0 B 吉井	0 F 西桐生
0 B 藤岡	0 E 華蔵寺	0 H 雷電神社	0 B 妙義	0 F 新伊勢崎
1 B 妙義神社	1 E 倭文神社	0 H 至上野駅	0 B 磯部	0 F 新桐生
1 C 六里ヶ原	0 E 利根川	0 H 至浅草	0 C 至長野	0 F 世良田
1 C 碓氷峠	1 F 谷川岳	1 H 善導寺	0 C 軽井沢	0 F 敷塚
1 C 熊野神社	0 F 大倉滝	1 H 茂林寺	0 C 熊野平	0 G 鎌田
1 C 榛名神社	0 F 至新潟	長形・桃	0 C 横川	0 G 戸倉
0 C 碓氷関趾	0 F 清水峠	1 D 伊香保温泉	0 C 松井田	0 G 銅山
1 C 安中杉並木	1 F 迦葉山	1 E 花敷温泉	0 C 原市	0 G 日光
0 C 板鼻町	1 F 吹割ノ滝	1 E 沢渡温泉	0 C 安中	0 G 足利
0 C 一里塚	1 F 高津戸峽	1 E 四万温泉	0 C 八幡	0 G 新足利
0 C 室田町	0 F 境町	1 E 法師温泉	0 C 榛名	0 G 佐野
1 C 箕輪城陞	1 F 阿佐美沼	1 E 湯宿温泉	0 C 箕輪	0 G 太田
1 C 高崎神社	1 F 東照宮	1 E 大室温泉	0 C 新町	0 G 尾島
0 C 高崎歩兵第十五聯隊	1 F 長楽寺	1 E 笹ノ湯温泉	0 C 新前橋	0 G 細谷
1 D 鬼押出	1 F 生品神社	1 E 湯島温泉	0 D 田代	0 G 小泉
0 D 鍋蓋山	1 F 敷塚鉱泉	1 E 川場温泉	0 D 三原	0 G 中野
0 D 田代湖	0 F 呑龍上人墓	1 F 湯原温泉	0 D 谷所	0 H 新藤原
1 D 鳥井峠 (ママ)	0 F 新田義重公墓	1 F 谷川温泉	0 D 草津	0 H 宇都宮
0 D 吾妻山	1 F 大光院	1 F 湯檜曾温泉	0 D 大津	0 H 栃木
0 D 本白根山	1 G 奥利根溪谷	1 B 磯部鉱泉	0 D 長野原	0 H 小山
1 D 芳ヶ平	0 G 至仏山	1 C 霧積温泉	0 D 原町	0 H 藤岡
1 D 岩櫃山	0 G 尾瀬ヶ原	1 D 中之條	0 D 中之條	0 H 館林
1 D 吾妻峽	0 G 菖蒲平	1 D 鹿沢温泉	0 D 伊香保	0 H 茂林寺前

* 1:裏面の一覧に記載があるもの 0:記載がないもの **文字ラベルの位置を示すA~Hの記号は図1に対応



図2 「勝地群馬」前橋市と吾妻川流域の部分

近代的な建造物が特徴的に描写されている。このほか、図右端には、佐久発電所のための取水口が設けられた綾戸ダム、図左上の吾妻川沿いの大津のラベルの下に、1931年竣工の大津ダムが描かれている。また、赤地のラベルの敷島公園の右には、ランドマークとなっている1929年完成の水道タンクがある。このようにラベルを付けていない図像の描写にもこだわりがうかがえる。さらに伊香保から榛名湖方面をつなぐ1929年開通の「ケーブルカー」(伊香保ケーブル鉄道)もみえる。これは、盛期には年間15万人を超える乗客を運んだもので、観光客誘致には欠かせない要素だったといえる。

また、本図は、貫前神社、妙義神社、榛名神社、玉村八幡宮、赤城神社、雷電神社といった神社を強調して描いており、表紙も貫前神社となっている。この当時、群馬県主導で進められていた敬神崇祖運動とのつながりがうかがわれる。

図3には、妙義神社と貫前神社付近を示した。名勝・妙義山は、白雲山、金洞山、金鶏山の三つの主峰からなり、奇岩、絶壁、石門がみられ、秋の紅葉の美しさで知られる。妙義神社は、白雲山の東麓に位置する。総門から石段を上がった右手は旧寺域で社務所と御殿があり、一直線に伸びる石段を登ると神域に至り、随神門と唐門をくぐると拝殿・幣殿・



図3 「勝地群馬」 妙義神社と貫前神社周辺の部分

本殿が現れる。こうした山並み、境内の構造や高く積まれた石垣などの特徴が巧みに描かれている。

貫前神社は上野国一之宮として篤い信仰を集めてきた。本殿・拝殿・楼門は、徳川家光の命による再建で、本殿は1912（明治45）年に国宝に指定された。その隣には東国敬神道場（現富岡市社会教育会館）がある。これは1936年3月31日の竣工で、鳥瞰図の発行は同年4月10日であったので、道場の建設と併行して描かれたことになる。

東国敬神道場は1934年の陸軍特別大演習のときの天皇行幸を記念して建設された。1935年に官民一体となって敬神崇祖精神高揚事業期成会が結成され、総工費81,952円95銭は全額寄附で賄われた。敬神崇祖の精神に則り、訓育・講習を行い、皇国の人材を錬成するための道場であり、1937年度の受講者総人員は3,294名となっている（東国敬神道場1938）。同年8月には国民精神総動員実施要綱が閣議決定されており、敬神崇祖精神高揚事業はこうした流れを先取りしたものと位置づけられる。

この後の群馬県勝地協会と戦時体制との関係については、次のVで検討する。

V 協会の出版物と観光資源の活用

1 協会の出版物と機関誌『勝地群馬』

群馬県勝地協会は、鳥瞰図や絵はがきに加えて、機関誌『勝地群馬』を1937年10月に創刊した。この雑誌の刊行は1939年4月の3巻2号まで確認される。これらの協会による編集・出版物を表8に示した。群馬県勝地協会の解散に関する記録を見出すことはできていないが、出版物の刊行状況からみると、1943（昭和18）年までは活動が続いていたことがわかる。

『勝地群馬』は本文40～50頁程度で、多くの写真を掲載しつつ各地を紹介する観光雑誌である。本文以外に広告が毎号10～20頁ほどあり、決算書の「歳入の部」をみると、雑収入に広告料金が含まれている。

表8 群馬県勝地協会による編集・出版物

発行年月	タイトル	備考
1936年4月	『勝地群馬』	鳥瞰図
1937年10月	『勝地群馬』創刊号	56頁
1938年1月	『勝地群馬』2号(2巻1号)	39頁
1938年4月	『勝地群馬』3号(2巻2号)	45頁
1938年7月	『勝地群馬』4号(2巻3号)	40頁
1938年9月	『勝地群馬』2巻4号	41頁
1939年1月	『勝地群馬』3巻1号	39頁
1939年4月	『勝地群馬』3巻2号	54頁
1939年9月	『群馬県旅館案内』	172頁
1939年12月	『スキー、スケート手引き』	65頁
1941年3月	『群馬の史蹟めぐり』	159頁
1942年6月	『上州路 湯の旅山の旅誌』	147頁
1943年10月	『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』	165頁
—	「出湯之国 群馬温泉郷」	案内図
—	「風景と温泉群馬」	案内図

頁数は広告を除く

表9 『勝地群馬』3号の配布先

会員	1,235
東京市の主な会社	131
京浜地方の会・倶楽部	220
ホテル・百貨店・旅行案内業者	50
東京所在大学運動部・学校関係	26
近府県主要駅その他	36
各府県観光協会	106
官公衙	146
本県縁故の県外有力者	131
本会役員その他	103
新聞社・記者	36
広告依頼者・原稿寄稿者	75
温泉業者	105
計	2,400

(『勝地群馬』4号, 38頁より作成)

表9に『勝地群馬』の配布先を示した。会員が1,235と最も多く、京浜地方の会・倶楽部、官公衙、東京市の主な会社、本県縁故の県外有力者と続く。東京所在大学運動部・学校関係も26を数えており、おもに東京とその周辺を対象として、宣伝活動をしてきたことがわかる。

『勝地群馬』創刊号で、群馬県知事・協会会長の土屋正三は「発刊の辞」を次のように述べている。

惟ふに観光事業は知見の啓発、情操の涵養、健康の増進、地方産業の開発、文化の交流等重

大なる使命を有すると共に、国際的には国民相互の親善を増進し国情の宣揚、貿易の伸展、国際貸借の改善等に貢献する所極めて大なるものありと信ずる。

由来本県は海浜こそ有せざれ、其の山岳・清流・溪谷・湖沼等は独特なる自然の景観を有し、尾瀬・丸沼・菅沼等一带の絶景を包容する日光国立公園を始め景勝風光に富む境域多く、又貴重なる史蹟は随所に散在し、更に各所に湧出する豊富なる温泉は実に五十余を算し全国に冠絶せる温泉郷として誠に天恵厚きものがある。(略)帝都郊外の遊覧・保養・探勝・運動・療養等の地として好適なる地の利を占むるを以て(略)之を内外に紹介して利用の十全を期するは、近代生活の要求に適応する重要事たと共に又天恵に酬ゆる所以であると思ふ。

このように観光事業の意義を説きつつ、景勝に富み、貴重な史蹟が散在し、豊富な温泉のある群馬県を利用してもらうように、内外から観光客を誘致する必要性を説く。他方、ジャパンツーリストビューロー専務理事の高久甚之助による「発刊を祝して」は、辛口の祝辞となっている。

群馬は四季の行楽地としてまことに堂々たる豪華版である。(略)東都から一二泊の旅として眺め向のところが多い。

斯うしたよき環境に恵まれながら観光群馬が、今日、織物群馬ほど光らぬ所以は、観光地として何かしら欠陥があるのではあるまいか。例へば宣伝なり施設なり接遇なり足らぬところがあるか、それとも観光に就ての理解や熱意が他の県ほど強くないとか、或ひは観光地相互間の連絡がとれてゐないとか、何かしら弱味があるのではあるまいか(略)。いくら観光資源豊富なりとも、競争の劇しい今日、腕組みしてゐては行足の繁くなる道理はない。

このように、群馬県の観光地は織物ほどの評判を得ていないと述べて、近代人の心を捉えるような施策の必要性を説く。

ここで、旅行での移動手段であった鉄道の輸送人員の推移を図4でみたい。全国では、1930年代後

半から1944年まで増加が続いて86億人に達しているが、1945年には70億人に急減した。群馬県内の鉄道では、上毛電気鉄道（中央前橋・西桐生間）は1944年に830万人と最多を記録している。上信電気鉄道（高崎・下仁田間）では1945年の落ち込みもなく、1946年に715万人に達している。いずれも1940年代前半の輸送人員の伸びが目立つ。

このように鉄道の輸送量が激増したため、総力戦体制のもと、団体遊覧旅行の制限、不要不急の旅行の抑制が行われた。こうしたなかでも体制に適應した「青年徒歩旅行」、敬神崇祖や健康増進を目的とした旅行は盛んであり（赤井2016）、温泉旅行の賑わいも1942年まで確認される（関戸2007：175-187）。総力戦体制は労働者層にツーリズムへの参加機会を拡大し、大衆化傾向を加速するとともに、旅行の「俗化」も深刻化した（高岡1993）。

上信電気鉄道の広告をみると（図5）、貫前寺社への参詣、神津牧場、荒船山から初谷鉱泉、内山峠から佐久方面への登山・ハイキングを案内し、健民運動への協力をうたっている。健民運動は、皇国民族の健やかさを保持増強することを目的としたものであった（厚生省人口局1942）。

こうした時期にも群馬県勝地協会によって、1941年に『群馬の史蹟めぐり』、1942年に『上州路 湯

の旅山の旅誌』、1943年に『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』が出版されている。

2 『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』による案内

『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』は、『群馬の史蹟めぐり』と『上州路 湯の旅山の旅誌』に一部の残本がなく、最近各方面より追加申し込みが多いため、要望に応え、二書に新コース4か所を加えて、改訂増刷して発行された。「発行趣旨と遊山の言」では次のように述べている。

山に行く、温泉に行く等神仏詣でを古来遊山の文字に於て表現す、遊山は時局に添はずとの言なきに有らず、其の行為に於て、其の心組に於て、不純の者一二ありしを問ふの言なり（略）要は之を利用し、之に鍊成せんとする者の道徳に待つべきものにして（略）戦争下の今日、己れの重責を念頭に於ての遊山こそ、大いに推賞すべきである、参詣せよ神仏、行こうよ山に、温泉に、朝の大気を吸つて声高らかに、遊山と

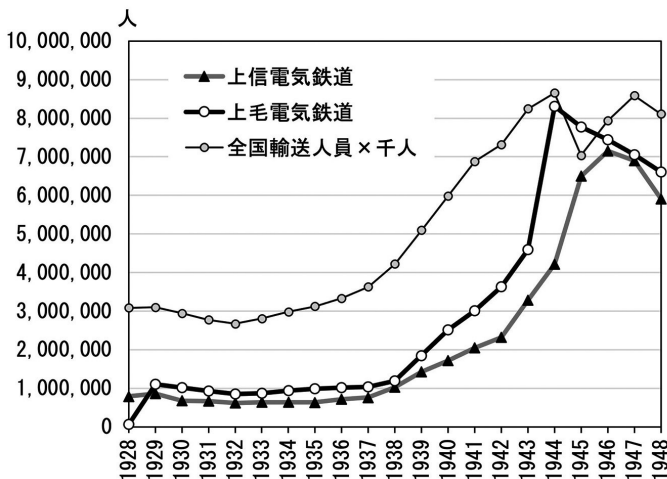


図4 昭和初期における鉄道の輸送人員の推移
 (『昭和期鉄道史資料』「日本の長期統計系列」より作成)

日歸健康路
 幽邃なる神苑
 貫前神社より
 薫風をついて

一路神津牧場へ
 荒船より初谷鑛泉へ
 更に内山峠より中込へ
 日歸り一泊健康路

健民運動に協力して
 貫通せる内山線41.3軒

中込



上信電鐵
 本社 高崎市鶴見町
 電話 { 150番
 1174番

上野

内縣山峠境

下仁田

一土ノ宮州

高崎

図5 上信電気鉄道の広告
 (『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』
 1943年、筆者蔵)

健民、遊山と敬神、遊山の文字を冒瀆するの愚を繰り返す勿れかし

このように時局に添った「遊山」の必要性を説いている。本書では、健康路として26のモデルコースが案内されている。以下では、「第一健康路 新田敬神路」を事例として取り上げたい。

1941年版では「新田敬神路」に一泊と日帰りの2コースが設定されているが、1943年版では日帰りのみで、基本的に徒歩でめぐらようになっていく。

第一コース 太田駅〈1km〉高山神社〈800m〉大光院〈2km〉新田神社（金山城址）〈1.2km〉浅間神社〈1.6km〉三枚橋駅〈5.3km〉生品神社〈4km〉反町薬師〈バス20分〉太田駅（または徒歩2km木崎駅）

コースの概要では、太田町を連想するとき、重要増産の地であり、子育て呑龍上人を知らぬ人は恐らくあるまい、重工業も戦いの部門ならば、子どもも重要な極みであろう、夢のような話に何か得るところ、それが神話伝説である、群馬の伝説と史実を、太田の大光院から参詣して、心身錬成のハイキングをし、思いを新たにすることも時局即応の健民錬成という、と述べている。

このコースをつなぐポイントを図6と対照しつつみたい。太田には、戦闘機を製造した中島飛行機の工場があり、図右端に描かれている。尊皇を説いた

高山彦九郎（1747～93）を祀る1878（明治11）年創建の高山神社、呑龍上人が開基した大光院、新田義貞を祀る1873年創建の新田神社と金山城址をまわって、金山の西尾根にある浅間神社を経て三枚橋駅に至る¹¹⁾。ここから藪塚駅までは東武鉄道があるが徒歩となっている。生品神社は「新田義貞拳兵伝説地」として、建武中興600年に際し、1934年に史蹟の指定を受けた¹²⁾。反町薬師（照明寺）は新田義貞居館跡と伝えられる反町館跡でもある。

「建武中興六百年祭」に続き、群馬県では「新田公六百年記念祭」があった。これは新田義貞の死後600年にあたる1938年に行われた。群馬県の署名のある「新田公六百年記念祭に就て」¹³⁾という記事には、「公の人格と功業とを顕彰して（略）益々尽忠報国の精神の発揚を図り、以て皇威の伸張に資する」とある。5月に県下の神社や関係寺院、学校などで記念行事が行われた。訓話や記念参拝行軍をとおして、尽忠報国精神の発揚や質実剛健の気風の涵養に努めることが求められた。

楠木正成を顕彰した1935年の「大楠公六百年祭」では、自治体、神社、マスメディア、鉄道会社によって各種のイベントが行われた（森2017）。これと比較すると規模は小さいものの、郷土の偉人・新田義貞にまつわる事物を発掘、活用していたことがわかる。こうした経緯から「史蹟と温泉巡り」の第一コー

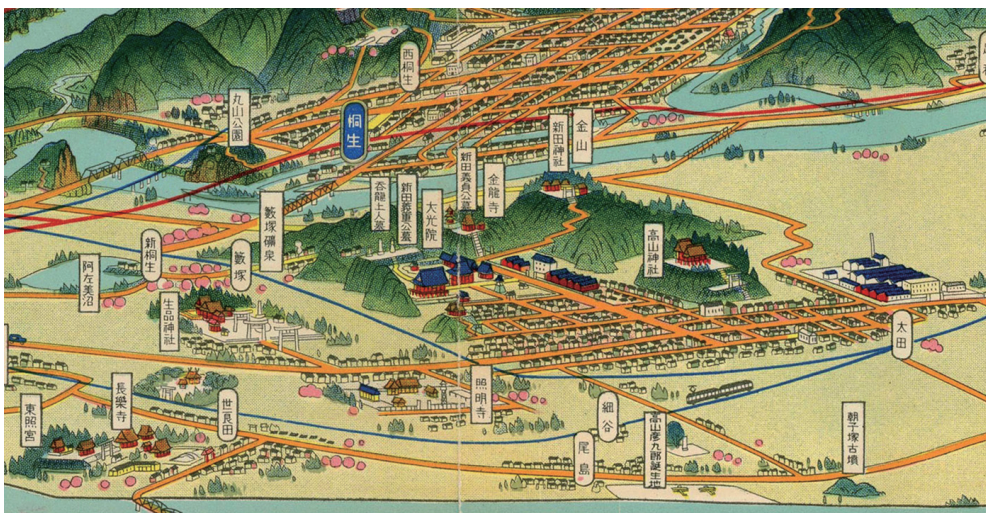


図6 「勝地群馬」太田町周辺の部分

スとして、おもに新田義貞に関係する場所をつなぐ「新田敬神路」を掲げたと考えられる。

VI おわりに

本稿では、昭和初期に推進された群馬県の観光プロモーションの特徴について、当時の社会的・地域的文脈をふまえて考察した。

群馬県では、1934年11月の陸軍特別大演習と昭和天皇の行幸、同年12月の日光国立公園の指定を背景として、1935年3月、群馬県勝地協会が設立された。これは、官民合同の組織で、勝地の保護発展を図り、内外から観光客を迎え、国土の精粹を顕揚することを目的としていた。協会は、映画の製作・上映、鳥瞰図・絵はがき・図書の刊行、新聞・ラジオによる宣伝などの事業を展開した。

観光客誘致のうえで多大の効果を収めたという鳥瞰図「勝地群馬」（1936年4月刊）の裏面には、名所、温泉、スキー場・スケート場、著名な神社・仏閣、史蹟・天然記念物、国宝・重要美術品・古社寺の一覧を掲載している。大半の場所は、鳥瞰図に描かれており、協会が宣伝したい観光資源と鳥瞰図の描写はよく連携がとれていたといえる。

日中戦争開始後、国民精神総動員と国民の体位向上という国策に沿った旅行が奨励された。そのため、健康増進に適当な温泉地、心身錬成に役立つ自然とともに、聖蹟や神社仏閣、偉人の史蹟などが旅行目的地として位置づけられた。

群馬県には、温泉地が多く、ハイキングや登山、スキーやスケートに適した自然も豊富にあり、これらは積極的に活用されていた。一方で、1936年に貫前神社の隣接地に東国敬神道場が完成し、1938年に「新田公六百年記念祭」が行われるなど、精神運動も推進されていた。1943年に改訂増補版として群馬県勝地協会が出版した『群馬健康路 史蹟と温泉巡り』も、こうした時流をふまえた内容になっている。史蹟を徒歩で訪ねてまわり、心身の鍛練を図ることを推奨しており、郷土の偉人や伝説などを観光資源として活用していた。

【付記】

本稿の一部は2018年3月に開催された日本地理学会春季学術大会で発表した。

【注】

- 1) 東京府編（1924）『史蹟名勝天然記念物保存法附・古社寺保存法 東京府史的記念物天然記念物勝地保存心得』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1337853>）13-14 コマ。
- 2) 内務省編（1921）『史蹟名勝天然記念物保存要目解説 名勝之部』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/959743>）。
- 3) 文部省編（1934）『史蹟名勝天然記念物保存法規』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1915484>）11 コマ。
- 4) 新田（2005）は、投票活動を報じた新聞のなかで、一躍全国的に名声をあげた菅沼は、群馬県民が結束して最高位を保持することを申し合わせるとともに、丸沼、尾瀬沼をあわせた尾瀬ヶ原一帯を国立公園とすべく期成同盟会を組織し、運動を試みるそうだ、という記事を紹介している。
- 5) 群馬県商工課「雑事」（群馬県立文書館・群馬県行政文書 A0181A0S395）。
- 6) 「群馬県勝地協会関係綴」（群馬県立文書館・県史資料 H18-1-1 近現 111/144）。
- 7) 前掲 5) と同じ。
- 8) 群馬県立図書館デジタルライブラリーで閲覧できる。群馬県勝地協会「群馬の風姿」（<https://www1.library.pref.gunma.jp/winj/archive/pdf/1101520741.pdf>）
- 9) 鉄道院編（1920）『温泉案内』。鉄道省編（1924）『スキーとスケート』。『温泉案内』は1927年、1931年、1940年に改訂版が出ている。
- 10) 群馬県立図書館デジタルライブラリーで閲覧できるが、破損箇所の補修跡がある。群馬県勝地協会「勝地群馬」（<https://www1.library.pref.gunma.jp/winj/archive/pdf/1101939315.pdf>）
- 11) 太田駅と藪塚駅の間には、三枚橋駅と治良門橋駅があるが、図では省略されている。
- 12) 本書には「昭和八年」とあるが、翌年の誤りである。
- 13) 上毛及上毛人 254, 1938, 1-9 頁。

【参考文献】

赤井正二（2016）「戦争末期の旅行規制をめぐる軋轢—『交通東亜』とその周辺—」（『旅行のモダンイズム—大正昭和前

- 期の社会文化変動―』ナカニシヤ出版) 175-221 頁。
- 荒山正彦 (1995) 「文化のオーセンティシティと国立公園の成立―観光現象を対象とした人文地理学研究的課題―」地理学評論 68A-12, 792-810 頁。
- 荒山正彦 (2003) 「風景のローカリズム―郷土をつくりあげる運動―」(「郷土」研究会編『郷土―表象と実践―』嵯峨野書院) 90-107 頁。
- 黒田乃生・小野良平 (2004) 「明治末から昭和初期における史蹟名勝天然記念物保存にみる「風景」の位置づけの変遷」ランドスケープ研究 67-5, 597-600 頁。
- 群馬県内政部編 (1943) 『著名社寺及国宝史蹟名勝概観』群馬県。
- ケネス・ルオフ (木村剛久訳) (2010) 『紀元二千六百年 消費と観光のナショナルリズム』朝日新聞出版。
- 厚生省人口局編 (1942) 『厚生運動』人口問題研究会。
- 斉藤利彦 (2019) 「西田直二郎と京都の史蹟調査―京都府史蹟勝地調査会を中心に―」歴史学部論集 9, 21-41 頁。
- 白幡洋三郎 (1992) 「日本八景の誕生―昭和初期の日本人の風景観―」(古川 彰・大西行雄編『環境イメージ論―人間環境の重層的風景―』弘文堂) 277-307 頁。
- 関戸明子 (2007) 『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版。
- 関戸明子 (2008) 「吉田初三郎の鳥瞰図」(中西徹太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験―絵地図と古写真の世界―』ナカニシヤ出版) 119-124 頁。
- 関戸明子 (2020) 「温泉地研究と歴史地理学」立命館地理学 32, 1-11 頁。
- 高岡裕之 (1993) 「観光・厚生・旅行―ファシズム期のツーリズム」(赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム―戦時期日本における文化の光芒―』日本経済評論社) 9-52 頁。
- 高木博志 (1991) 「史蹟・名勝の成立」日本史研究 351, 63-88 頁。
- 東国敬神道場編 (1938) 『東国敬神道場概要 (昭和十三年版)』東国敬神道場。
- 新田太郎 (2005) 「情報化する風景―「日本新八景」候補地の選考過程」(東京都江戸東京博物館編『美しき日本―大正昭和の旅展』) 176-183 頁。
- 堀田典裕 (2009) 『吉田初三郎の鳥瞰図を読む』河出書房新社。
- 森 正人 (2017) 『展示される大和魂―〈国民精神〉の系譜』新曜社。

